

◇◇LCC 大交流時代への期待◇◇

皆さんは、安く飛行機を利用できるならば、もっと旅行に行ってみたいと思いませんか。

今年に入り、アジア最大のローコストキャリア（LCC）であるエアアジア（本社：クアラルンプール）とカンタスグループ（本社：シドニー）が、共同出資によりそれぞれエアアジア・ジャパンとジェットスター・ジャパンを会社設立すると相次いで発表した。アメリカで始まり、ヨーロッパや東南アジアに展開された LCC が、日本市場に本格的に参入することになる。LCC は、従来の航空運賃に比べて半額程度の格安運賃をキラーサービスに、そのシェアを拡大してきた。今後は、世界や国内各地との移動にかかる費用、いわゆる経済距離を縮め、交流人口の増大に寄与することが期待されている。

さて LCC は、航空、観光業界をはじめとして、日本経済にどんな影響を与えるのだろうか。日本の航空旅客輸送は、2000 年代に入り人口減少や内需低迷により、頭打ちの状態が続く飽和状態に陥っている。観光地やリゾート地への航空路線は収益が低いため、従来のフルサービスを提供する航空会社（FSC：フルサービスキャリア）は積極的に直行便を就航させようとしてこなかった。日本人が海外旅行に行く割合（年間出国者総数を総人口で除した値）は 12%程度であるが、海外旅行に行きたいと考える人の割合はその 2 倍いるという調査もある。現に、航空規制緩和により LCC の会社設立が相次いだ米国では、1990 年代の 10 年間で、国内航空旅客数（年間）が約 4 億人から約 6 億人に急増した例も存在する。このように、航空機を利用したいという“潜在的な利用者”は多数いると考えられており、LCC は飽和状態が続く航空需要を活性化させる起爆剤としての効果が期待されている。

また、経済低迷に苦しむ地域経済にとっても、LCC は大きな経済効果をもたらす可能性を秘めている。日本は、南北に長い国土で、四季の変化に富んでおり、豊富な観光資源を有している。旅行者にとっては、多様でいつ訪れても違った姿を見せる観光地は、新鮮で魅力的に感じるはずだ。LCC が観光地と主要都市とを直行便で結ぶことで、国内外から多くの訪問者を集め、観光需要を発掘できる可能性は十分にある。ジェットスター航空（本社：メルボルン）が、インドネシアのバリ島とオーストラリアの主要都市間を結んだことで、オーストラリア人のバリ島訪問者（年間）が、2007 年の 20 万人から 2009 年には 45 万人に倍増した例もある。このため地方自治体は、地元空港への LCC 誘致に積極的であり、周辺観光地と一体となった活動を行うことで、地域特有の食や物産をアピールし、買物消費の拡大につなげていくことが期待されている。

最後に、LCC は従来の航空会社の既成概念にとらわれず、コスト削減と単純化を徹底することで成功してきた。その経営スタイルは、挑戦的かつ革新的であり、企業の成長スピードも遥かに速い。LCC が大きく羽ばたくことで、東日本大震災の復興にあえぎ、閉塞する日本経済に一石を投じることも期待されている。

平成 23 年 10 月 公共経営戦略コンサルティング部 宮前 直幸